

文豪先生

〜bungousensei〜

第九話

中川善史

絵・かないてつお





村に緊急事態が発令されました。

分教場を背にして、校庭に土嚢が積み上がっています。その前には塹壕が掘られていきます。後ろの方では丸太が組みれ櫓が立ち上がっています。食料や薬が運び込まれます。村の人が総出で、作業をしています。

皆が作られているのです。

村はかつてない緊張状態にあります。人々は鋤や鍬で武装し、耕耘機やトラクターや牛は板や鎖でよろわられて装甲車のようです。

押し寄せてくる危機に対して、村はこの分教場の校庭に陣地を築き、決戦を挑むことになったのです。

村長、助役はもちろん、文豪先生、砂府青年、民子、ろんろん、ハムー、そして子供達まで、陣地に入って鉢巻きを締めて戦いに臨む構えです。

櫓の横には舞台が組み立てられ、そこでは、村長の白井童子が巫女のような衣装を

着て、戦勝祈願の舞を舞っていました。

櫓の上には、砂府青年が乗って遠見をしています。

「来たぞー！」

砂府青年が叫び、合図のラッパを吹きました。みな、一斉に山の方を注視しました。

山の方から村に降りてくる道に、白い小さな点のようなものがいっぱい現れ、ちらちらと動いています。そして、そのものたちはゆつくりと、右に左にばらばらと動きながらも大きな流れは村の方へ下ってくる模様です。ものすごい数です。道はたちまち、白い粒で埋め尽くされ、たちまちこぼれ、脇の田畑や林や集落の中にまで、その点々は侵入していきます。

「来たな・・・」

双眼鏡を覗いてた文豪先生がつぶやきます。

「見せてください」

となりにはいた民子が双眼鏡を受け取ります。ここからは肉眼では粒のようには見えないものが、レンズの向こうにはつきりと正体を現しました。

「あひる・・・」

前回、制御不能に陥った源太夫のあひるのからくりたちが暴徒と化し、道々の家押し倒し田畑を踏みつけにして、村へ向かって攻め下ってくるのです。

一羽や二羽ならともかく、何万羽にもふくれあがったあひるの集団に襲われたら、この小さな村はひとたまりもないでしょう。

やがて、マーチングドラムの音、「ぐわっぐわっぐわっぐわっ」というあひる

の聲が、聞こえてくるようになりました。坂の途中の家がまた一軒、土埃を上げて倒壊するのが見えます。

「近づいてきた。みんな戦闘準備だ！」

と、砂府青年の聲が響きます。

分教場から続く道に、最初の一羽が姿を現しました。それは、見る見るうちに姿を増し、道にあふれかえっていきます。

「ぐわっぐわっぐわっぐわっ」というあひるの鳴き声。ざっざっざっざ、という土を蹴るその足音。

「待て、もう少し引きつけるんだ」

「ろろんが、先陣を切るぞ！」

と、巨大化したハムーに乗って胸当てをつけたろろんが矛を手にし声を上げます。

「ろろんとハムーが突っ込むから、混乱に乗じてみんな突撃してくれ！」
「よし！頼むぞ！」

暴走モードになったハムーが一気にあひるの群れに突っ込み、隊列を崩し、そのままあひるを蹴散らしながら奥まで突き進み、また、向きを変えてむちゃくちゃに走り回ります。その上のろろんも、矛をふるって、次から次へと、あひるを血祭りに・・・といっても、からくりですので血は出ません、あひるをあひる祭りに上げていきます。

「よし、いいぞ！われわれも後に続け！突撃！」

鍬や鋤を持った村人、耕耘機、トラクター、自転車、牛、馬、犬、猫などが、いつ

せいに喚声を上げて走り出します。

「あ、あれは、なんだ」

と、村人のひとりが群れの後方を指さして叫びます。

見ると、あひるの白い集団が後ろの方が小山のように盛り上がって来ました。その盛り上がりは、どんどん大きく高くなり、高さが五十メートルほどにもなったかと思われた時、それは、巨大なあひるの姿になりました。巨大なくちばし、うつろな目……、ぐわーっと地響きのような声を上げます。

「あ、あれは……」

「最強の宇宙あひる怪獣、キング・アヒラーだ！」

「からくりの集団が、キング・アヒラーに合体変身したんだ！」

キング・アヒラーは、口から怪光線を発射して村の家々を焼き尽くし、すさまじい足音を立てて村を踏みこじっていきます。たちまちのうちに、分教場に近づきました。

人々は算を乱して壊走します。泣き叫ぶ声が聞こえます。

「うわー、もう、おしまいだ」

「村は壊滅だー！」

勝ち誇るかのようなキング・アヒラー、昼間だというのにあたりは真っ暗に見え、燃え上がる村が夕焼けのように真っ赤になっています。一軒、また一軒と村の家々が焼け崩れていきます。民子はその恐ろしい光景が涙でゆがんでいくのを覚えました。

「民子ちゃんも早く逃げるんだ！」

カラクリ大怪獣

キング アヒラー



「・・・もう、だめだ、わたしの大好きなこの村が・・・」

・・・民子は、ひそかに恥じていました。

「確かに源太夫さんの工房であんな目にあつたから、後を引くかも知れないとは思つたけれど・・・」

しかし、夢に見てしまった内容が情けないのでした。

「キング・アヒラー・・・なんて幼稚な・・・」

目を覚ますと顔が涙でぐしゃぐしゃになっていたのが、また口惜しいのでした。そして、そんな悪夢は忘れて仕事に専念しようと思つた矢先、田んぼから飛び立つ白鷺を分教場の窓から見かけて思わず、

「あ、キング・アヒラー」

と、声に出して言つてしまったのも、まずかつたと思ひました。後ろで白井村長が心配そうな顔をして立つていたのは、さらにまずかつたと思ひました。

「民子ちゃん、悩みがあつたら自分だけで抱えていちゃだめよ。なんでも相談してね」

「あ、ありがとうございます」

できません。いくらなんでも、キング・アヒラーのことなど、村長に相談するわけにはいきません。

「これは、私だけの胸にしまつておこう・・・」
当たり前です。

昼食の時間です。民子が席について、思わず

「はあー」

と、ため息をつくくと、となりでも

「はあー」

と、ため息をつくのが聞こえました。杉本幸太でした。

昼食の時間は、村役場の人も分教場の子供たちも一緒になって食べます。分教場の机を大きなテーブルのようにくっつけあわせて並べて、その周りではどこに座ってもいいことになっています。

「幸太くん、どうしたの、ため息なんかついて。悩み事でもあるの？」

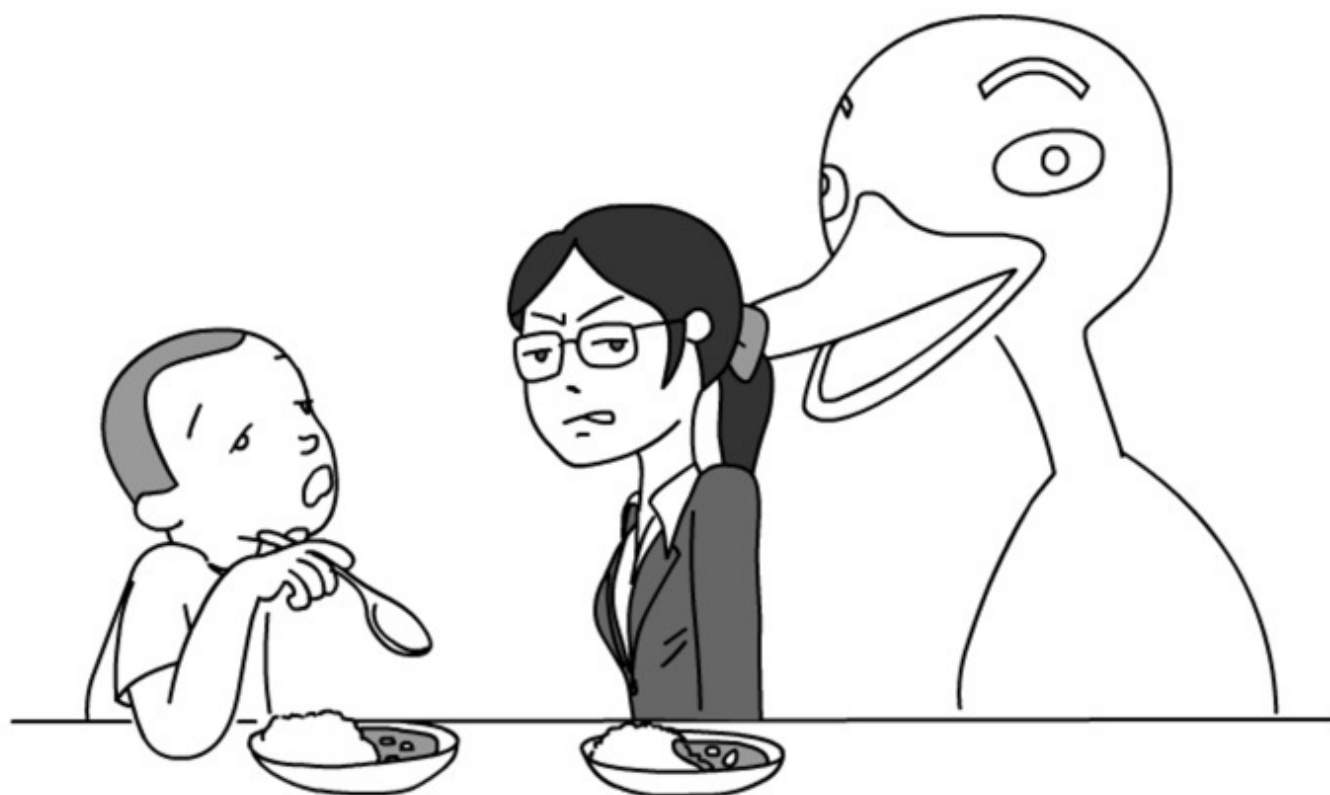
「ほっといてくれよ……それより、民子ねえちゃんこそ、悩み事？」

「うっ」

と民子はつまりました。悩める小学生の前で、いくらなんでも「キング・アヒラー」はないだろう、というわけです。

「ううん、ねえちゃんはおちよつと寝不足なだけだよ……そうそう、昨日、幸太君のお父さんにお会いしたんだよ」

「うん。聞いた……うちの父ちゃん……すごいだろう」「すごいね。よくあんなからくり人形が作れると思う」



て、感心しちゃったよ」

「うん。でも、そういうすげさじゃなくて……変わってるだろう？」

「え？ まあ、なんていうか……個性的……だね」

「いいよ。はつきり、変だっていつても。父ちゃん、俺にはやさしいけど、やっぱり変だと思うよ。あーあ、俺も跡を継いだら、あんなっちゃうのかなあ」

「そんなことないよ。からくり師だって、常識的な人はいっぱいいるよ」

「……やっぱり、父ちゃんのこと非常識だって思っているんだ……」

「あ……」

「いいんだよ、みんなそう言うんだ……それよりさ、民子ねえちゃん、お地蔵さんと仲いいだろう？」

「仲いいというか、よく会いに行くわ」

「お地蔵さんて、本当の仏様だよな」

「うっ」

と、また民子は詰まりました。子供に向かって、地蔵はまだ魂を入れてもらっていないから「本当の仏様」じゃない、などとは言えません。この問題では、地蔵を泣かせかけたことがありました。

「ま、まあね、そうね、まあ仏様だね、そんなもんだね……」

まあ仏、とは、なんちゅー返事だ、と民子は自分でも思いました。

「えらい仏様なら、なんでも知っているのかな」

「えらい仏様……」

民子の脳裏に「おーれは ひーろー すーぱーじぞう」とロックンロールを歌う地蔵の姿が浮かびました。

「えらい仏様ねえ・・・」

「ねえちゃん、どうしたの？」

「ん？ いやいや、なんでもないよ。それなりに、えらいんじゃない？ たぶん・・・」
民子は、ますます受け答えがおかしくなり、目が宙に舞っている、と感じたので、

「それよりさ、幸太君はお地藏様のなにが気になるの？ もう、地藏堂は出来上がるんでしょ？」

と、幸太の質問を無理矢理ねじ伏せに出ました。

「うん、地藏堂は出来上がるけど・・・それよりさ、ねえちゃんも、お地藏様の話になってから様子がおかしいよ。何か、気になるの？」

「幸太君こそ気になっていることがあるんでしょ」

「ねえちゃんから言いなよ」

「幸太君からおっしゃい。大人の言うことを聞きなさい」

民子はきつとなって言いました。

「ちえ、ねえちゃん、なに怒っているんだよ・・・でも、

言えない・・・」

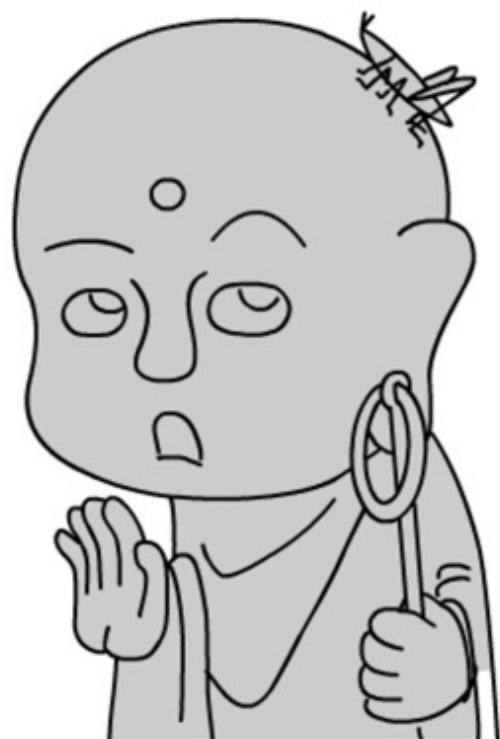
「言えないって、なにが」

「あのことばらしちゃうぞって・・・あ・・・」

「な、なによ、それ。お地藏さんに何か脅されているって言うの？」

「なんでもないよ、なんでもないよ・・・」

「脅されているのね・・・」



「なんでもないったら・・・」

「なんでもなくない！ お地藏様ったら、何考えているのかしら。子供を脅すなんてとんでもない・・・」

「ねえちゃん、お地藏さんって、本当になんでも知ってるのかな」

「知ってるわけない！」

「え？」

「いや、ほら、えらい仏様だっつてね、知っていることと知らないことがあると思うよ、そりゃね、きつとキリスト教の聖人の名前全部言えっつたっていえないだろうしね・・・」

「なにそれ」

「いや、だから、安心しなよ、大丈夫だから」

満月がさやかに村中を照らしています。野も道も、白々と銀色に浮かび上がって、ものの影も日中のと比べて、影の奥に銀砂でも流したようです。

かーん、こーん、ぽこーん、と鼓とも太鼓とも聞こえる音が村の空に響き渡ります。それは、文豪先生の家から響いてくるのでした。

「また、いい音がするもんだな」

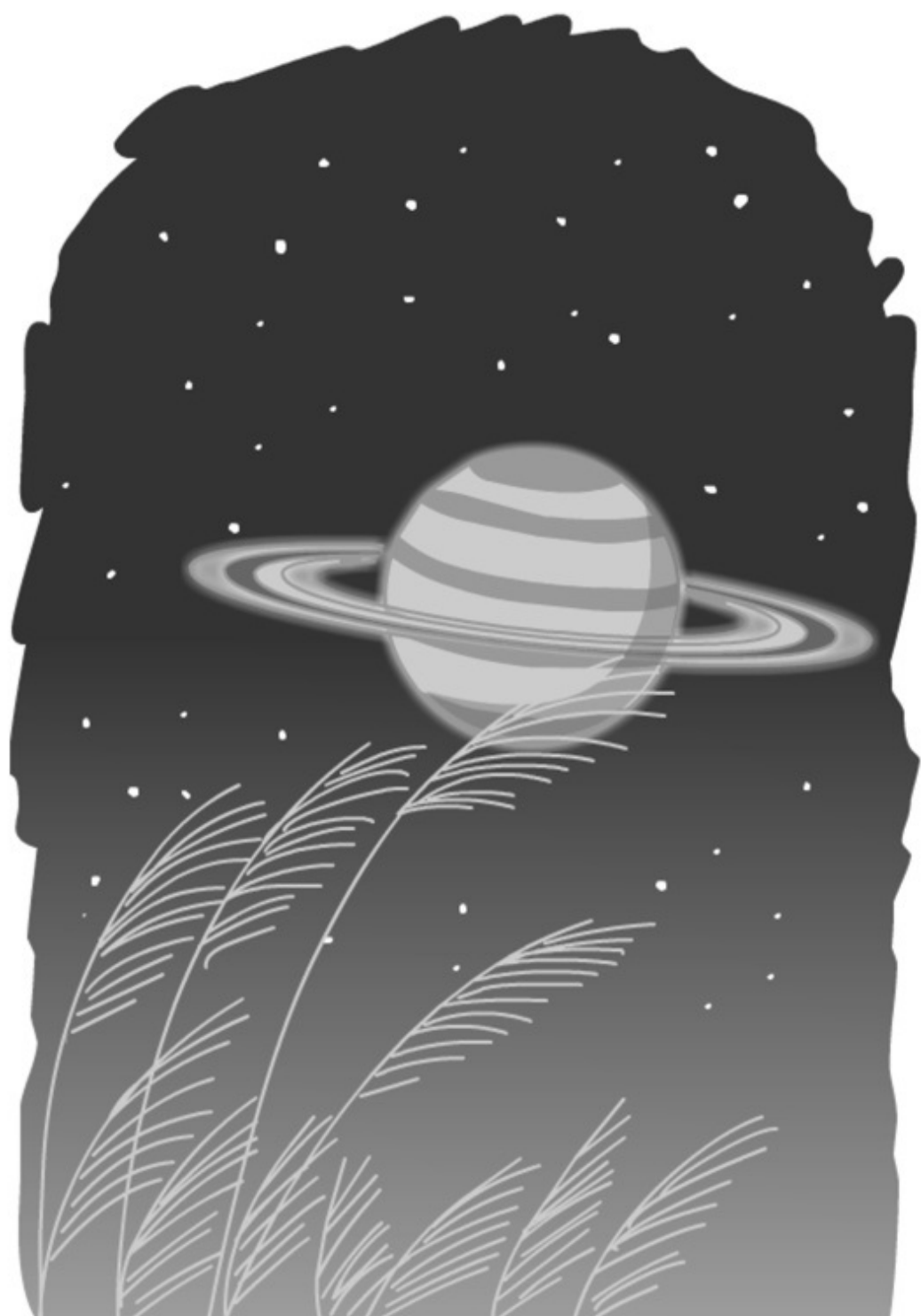
と、縁側に立って夜の庭を眺めている先生が言いました。

「ふう・・・」

と、庭にいろろんがため息をつきました。

「今度はどんな尻尾が生えてくるかと楽しみにしていたら、たぬきの尻尾だった。おまけに・・・」

と云って、お腹を拳で叩くと、ぽーん、といい音が鳴りました。
「尻尾がたぬきになったら、腹鼓が打てるようになってしまった・・・」
虫の声を背景にして、ぽーん、かーん、と夜空を腹鼓の音が越えていきます。



一方、こちらは地蔵です。

ぽーん、ぽかーん……。

「ぼーくは ひーろー すーぱーじぞう

わるーいやつらを やっつけなーい……」

「はあ。どこから聞こえてくるのか、鼓の音に合わせて歌を歌っていたら、しみじみしてきちまったなあ……お月様では、ウサギが餅をついているよ……。火星ではカメが蕎麦を打っているだろうな。金星ではクマが寿司を握っていて、木星ではキツネがお好み焼きを焼いている……。ああ、星空は満天の夜店の屋台だ……」

などと、詩的な思索にふけっていると、

「おじぞうさーん」

月明かりのなかを民子がやってきます。

「た、民子さん……」

思いがけない民子の来訪に、地蔵、目がきらりーんと光り、さらにはうるんでききます。

「こ、こんな夜に、ど、どうしたんだい……」

「とてもいいお月様だから、お地蔵様とお月見しようと思ってお団子持ってきたんです」

「お、おだんご？」

「そうですよ、いろいろお話を聞こうと思って」

と、民子は包みから、みたらし団子を出しました。

「はい、お地藏様、食べさせてあげますから、あーんして下さい」

「あ、あーんって……いい、いいの？」

「はい、あーん」

「あ、あ、あ、あ」

「それじゃ、食べられないですよ」

「で、で、で、で、で」

「で？」

これは、でーとだあ！！！と地藏は思いました。しかも、こんな浪漫ちっくな月夜に……。彼女……。なんの話があるのかな……。

『お願い、お地藏様、わたしと結婚して……』

『すまねえ、民子、俺は旅に出なきゃいけないんだ』

『わたし、あなたがいなくては生きてはけない……』

『これが運命つてもものよ……俺は旅から旅への旅ガラス……風の向くまま気の向くまま、気まぐれ地藏とは俺のことだ』

『どうしても、一緒に行っちゃ行けないの？ わたし、どうしたらいいの？』

『ふ、民子……惚れちゃいけない男に惚れちゃったな……』

夕日のなか、村道を馬に乗って去っていく俺……。

民子の哀切な声が響く……。



『おじぞうさまあ……』

(以上、地蔵の妄想タイム)

「……ま、どんな重大な告白にせよ、最初は、さりげない話から入って……」

と、地蔵が一人口の中でもぞもぞ言っている、民子が

「お地蔵様、あした、地蔵堂ができるんですって」

「さ、さりげねーっ」と地蔵。

「思いつきり、さりげねーっ……いい導入部だね、民子くん」

「幸太君がそう言っていました」

「そ、そう、幸太君がね……」

「彼、一生懸命作ってくれたんですよ。お地蔵様のためにつて」

「あ、いっしょうけんめいね。こうたくんがね……あの、それはいいんだけど、今日は、どういう話？ 僕たちの将来とか？」

「ですから、今日は子供のことです」

「こどもー！」

地蔵の目が飛び出しました。

「け、けっこんをとびこえちゃって、い、いきなり、こども？ じ、じぞうと、にんげんのあいだに、こどもって、で、で、できるのかな？？」

「あの、どうしたんですか」

「ちよ、ちよつとまって……ぎぶ・みー・わん・みにつつ……心を落ち着けるからね……ええ、本日は晴天なり、本日は晴天なり……です、です、です……」

かえるびよこびよこ、みびよこびよこ、赤子泣いてもフタ取るな……ええ、だ
いぶ動悸が静まってきた……」

ここで、地蔵は思いつきりキリツとした顔を作りました。

「民子くん、僕の話聞いてくれたまえ」

民子はこくりとうなずきました。

「要するに、君は僕たちの将来について語り合いたいわけだね」

民子は、またこくりとうなずきました。

「でもね、いきなり子供というのも、ちよつと早いんじゃないのかね」

民子はこくり。

「その前にいろいろとあるだろう……仲人とか結納とか、ええと、結婚式場を
決めたりとか、招待状出したりとか、挨拶は誰にするかとか、余興で歌わせない
と後でむくれる親戚は誰と誰とか……ええ、それから、新婚旅行ね、まあ、新
婚旅行となれば一週間くらいかなあ……ほら、君だって、村長に言つて休みの
許可もらつとかかないとね」

こくり。

「村長と言えば、式で挨拶してもらわんとまずいだろうなあ。あ、文豪先生はど
うだろう。いちおう小説家だからなあ。しかし、あいつ、ろくなこと言わなそう
だよなあ……ねえ、君、どう思う？」

こくり、こくり。

「いや、うなずいているんじゃないかと、君の考えを聞かせて欲しいんだけど」
こくり、こくり。

「あの、民子くん、聞いている？」

こくり、こくり。

「あー！ 寝ているー！」

(民子は、不意に眠り込んでしまうと言う癖があるのです。ウソだと思っただら第三回を見てください)

さて、民子は地蔵の話をごここまで聞いていたのでしょうか、って聞いてもしょうがないですけど。幸太の悩みは晴れたのでしょうか・・・って、晴れるわけじゃないですけど。次回に続きます。(つづく)



文豪先生 第九話

<http://p.booklog.jp/book/59442>

文豪堂

著者：中川善史

絵：かないてつお

たのしい文豪堂書店ブログ：<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/59442>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59442>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ